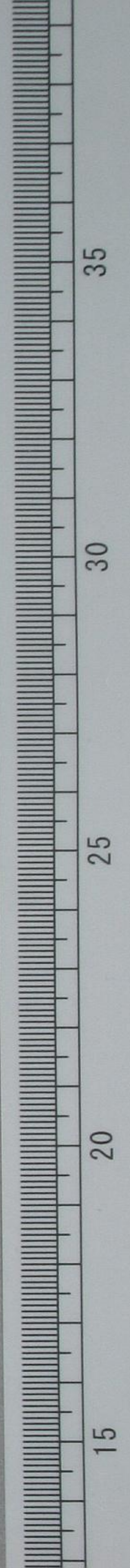


英國李金得氏著
小松原英太郎譯

日本開進論
卷壹

柳田文庫
文庫11
A1960



1960

ゼネラル・レゼンダー氏原著
小松原英太郎譯述

日本開進論

版權免許 成允堂藏梓

緒言
九ツ家國ノ事業ニ於テ奮發自任能ク開進ノ切
ヲ奏ノ遠大ノ美果ヲ収メント欲スレハ先ツ其
家國從來ノ歴史沿革及ビ現在ノ地位形情ヲ知
察シ以テ將來ノ方向ヲ定メスンハアル可カラ
サルナリ蓋シ慷慨奮發剛毅耐忍進取自任ノ精
神氣象ナル者ハ則チ其家國從來ノ歴史ニ通シ
現在ノ有様ヲ見テ慷慨ス可ク奮激ス可ク自任
ス可ク且ツ耐忍進取セサル可カラサルモノヲ
ルヲ知ルニ因テ始メテ感發スルモノナリ故ニ

日本開進論

卷之一

緒言一

成允堂藏版

從來我邦人が慷慨奮發進取自任ノ精神ニ乏シ
キハ畢竟數百年間武族專制ノ下ニ立テ卑屈奴
隸ノ境遇ニ安ンジ一國社會ノ事ヲ舉テ之ヲ政
府ニ依托シテ曾テ政事ノ沿革又ハ天下ノ形勢
ニ注意セザリシニ之レ由ルナリ試ミニ思ヘ人
誰レカ徒ラニ世ヲ慨シ國ヲ憂ヘ心ニ感激スル
所ナリシテ奮發興起スル者アラシヤ然レハ則
チ慨世憂國自カラ國事ヲ擔任シ社會ノ開進ヲ
企圖スルトコロノ公愛自任ノ精神ハ必ラズヤ
其歴史ノ沿革政事ノ得失及ヒ國家ノ現狀ヲ熟

察ノ或ハ國勢ノ萎靡ヲ慨シ或ハ自由ノ衰弱ヲ
歎シ奮ツテ國事ヲ自任シ社會ヲ愛護セサルヘ
カラサル丁チ感知スルニ因テ推揮振作スルニ
外ナラサルヲ知ル
且ツ夫レ其國ニ生レテ其國ノ歴史沿革ノ奈何
及ビ政治法律ノ何物タルヲ暗熟セスシテ可ナ
ランヤ何トナレハ之ヲ暗熟スルハ則チ其國人
民ノ應ニ注意ス可キ當然ノ要務ニシテ社會人
民カ各自ノ自由幸福ヲ保擡スルニ於テ肝要ナ
ルモノナレハナリ故ニ英米國人ノ如キハ殊ニ

此ニ注意スル所アリ普通教育ニ於テモ自國ノ
 政治法律歴史沿革ハ必ラス不可缺ノ者トセリ
 矧ンヤ歴史ハ自由ヲ存立シ維持スルニ於テ貴
 重ナル根據成例ヲ與ヘ自由公愛ノ精神ヲ發育
 スルニ於テ要用ナル滋養物ヲ給スルモノナル
 ニ於テヲヤ蓋シ我國維新大變革後ノ歴史ハ人
 民ノ最モ注意ス可キ所ノ者ニシテ而シテ五箇
 條ノ聖約ノ如キハ實ニ憲法ノ基礎ニシテ日本
 人民ガ據テ以テ自由民權ヲ擴充スルノ根據ナ
 ルニアラスヤ

方今我國ハ外世界萬國ニ對峙シテ内富强開明
 ノ基礎ヲ定ムルノ秋ニ方テ制度法律ヨリ工業
 物産及ビ文明上諸般ノ事業ニ至ルマデ悉皆猶
 ホ襁褓ノ中ニ在リテ幼稚ノ發生ヲ免レス而シ
 大切ナル發達ノ順序ニ於テ或ハ躁進ニ失シテ
 無闇ニ外國ノ行情ニ模倣センコトヲ勉メ或ハ形
 勢姑息ニ流レテ自由強盛ノ基礎モ容易ニ確立
 セズ商業未タ振作セス物産未タ盛大ナラス國
 會未タ興ラス大臣責任法未タ定マラス制度憲
 法ノ漸ク確定ニ至ル可クシテ未タ確定セサル

モノハ一ニシテ足ラス此ノ現今及ヒ將來ニ向
テ企圖ス可ク成就ス可キ事業ノ堆積セル時運
ニ於テ何ソノ我國現在ノ地位形勢ニ注意シテ
將來開進ノ方向ヲ講究セスシテ可ナランヤ之
ヲ講究スルハ誠トニ我カ國民タル者ノ今日ノ
要務ナルヲ信スルナリ
然リ而シテ此書ノ如キハ我が日本帝國ノ開進ニ
就テ古來ノ歴史沿革ヲ察シテ現在ノ事情ヲ吟
味シ特ニ維新大變革以後ノ進歩改革ノ形情ニ
付テ其利害得失ヲ詳論シ以テ將來ノ方向ヲ論

定セシモノナリ而シテ著者ハ則チ米國ノ學士ニ
シテ久シク我國ニ在留シ曾テ日本ノ國事ニ與
カリテ頗ル力アリシ博學達識ノ人物ナレハ其
穿鑿ハ或ハ容喙ス可ク其議論ハ或ハ異説ス可
キモノナキニ非ラスト雖モ要スルニ我カ日本
人民タル者ノ必ラス一讀セシムバアル可カラ
ザルノ著述ナリ然レハ則チ自國ノ歴史沿革地
位形勢ノ奈何ヲ察知シ奮ツテ國事ヲ擔任シ能
ク開進ノ目的ヲ接近シテ遠大ノ美果ヲ將來ニ
獲収セント欲スル者ノ為メニ亦タ以テ參考ノ

一本篇中單ニ吾輩余吾々我國ト書シ又ハ年紀
 ヲ署スルハ悉ク著者ノ言ニ准スルモノナレ
 ハ之ヲ著者ノ代名詞又ハ西洋ノ年紀ト見テ
 責ヲ譯者ニ歸スル勿レ若シ譯者ノ意見ヲ記
 スルモハ必ス譯者曰ク等ノ文字ヲ加フルヲ
 例トナスアルヘシ

一原文ノ妙處ヲ害セサルガ為メニハ或ハ直譯
 一法ヲ用ヒ故テニ割註ヲ加ヘテ解釋スルモノ
 モアリ讀者本篇ニ就キ()ノ間ニ勿々ノ看
 目ヲ下ス勿レ

一本邦ノ明文アル制度法律等モ本篇中ニハ全
 ク彼レカ翻譯セシモノヲ復譯セシモノナレ
 ハ儘ニ公布ノ明文ト文字詳略等ノ差異アル
 ヘシト雖モ只其意味ニ害アラサルヲ要スル
 ニ附キ一々之ヲ規矩準繩セサルナリ

一著者ノ論旨或ハ譯者ノ意見ト合ハサル者ア
 レモ本篇ハ專ラ譯解ヲ主トシ著者ノ意ヲ害
 セサルヲ旨トスレハ本篇文中ノ是非得失利
 害可否信偽虛實等凡テ議論ニ掛リテハ譯者
 ハ決シテ其問答ノ責ニ任セサルヘシ

明治十二年第三月

譯者自識

日本開進論 卷之一 第一編 過去現在未來ニ於テ日本帝國ノ 政事及ヒ社會上ノ改良ニ切要ナル 事件ヲ論ス 第二編 千八百六十八年（明治元年）以 前ノ制度及ヒ千八百七十五年（ 明治八年）ノ改革 第三編 千八百七十五年ノ改革ニ就テ諸 政事家ノ意見 第四編 專治政府十一年間ノ結果

日本開進論總目錄

第一篇 過去現在未來ニ於テ日本帝國ノ

政事及ヒ社會上ノ改良ニ切要ナル

ル事件ヲ論ス

第二篇 千八百六十八年（明治元年）以

前ノ制度及ヒ千八百七十五年（

明治八年）ノ改革

第三篇 千八百七十五年ノ改革ニ就テ諸

政事家ノ意見

第四篇 專治政府十一年間ノ結果

- 第五篇 政法改革，根理上
- 第六篇 政法改革，根理下
- 第七篇 理論及ヒ實際事業
- 第八篇 改造論上
- 第九篇 改造論下
- 第十篇 華族，新産業
- 第十一篇 富盛衰類，源ヲ論ス

第一篇 國土與未來ニ於テ日本帝國ノ
 日本開進論目錄



序論

方今日本人民ノ位地タルヤ大ニ吾同感相憐ノ
 注意ヲ喚起シ其過去ノ在ト未來ノ時トノ間ニ
 立テ現今ノ艱難ニ遭逢スルヲ以テ數年以來打
 毀者カ打毀セシ者ト其前ニ積集セル材料トニ
 就テ往々其孰レカ種子孰レカ碎片ナルヤヲ辨
 別スルコト能ハサル者アリ故ニ余カ此書ヲ著述
 スルノ目的ハ此困難場裏ニ向テ多少ノ光線ヲ
 放テ可成的ニ一々其事情ヲ照明スルニ在ルナ
 リ然レドモ此事業ヲ企圖スルニ於テハ亦全ク

私慾ナキニ非ス何トナレハ東亞細亞ニ於テ日本及ヒ其隣邦ノ如ク親密ニ合衆國ト其利害ヲ與ニスベキ關係ヲ有スルノ國民ハ亦他ニ非ラサレハナリ此等ノ國民ハ之ヲ歐洲諸國ノ如キ世界中最大ナル製造ノ中心ニ比スルモ却テ吾國ニ接近シ加フルニ人口幾ント四億以上ノ大集合ヲ為スヲ以テ若シ吾國物産工業ノ發達其ノ極度ニ達スルアレハ今日吾輩カ歐洲大陸ヨリ仰ク所ノ需要品ヲ以テ之ヲ世界ニ供給スルヲ得ルノ日ニ至ルハ此等ノ諸國ト我國トノ關

係ハ双方ノ所要ニ因リテ益々堅固ナルニ至ルヘク且ツ何人モ決シテ前言シ能ハサル所ノ一大激勵ヲ受ケサルヲ得サルニ及ハシ故ニ此等ノ國カ富强昌盛ニシテ各自相和シ及ヒ西洋諸國ト平和親睦ナルハ則チ亦タ我國ノ利ニシテ其益々富盛強大ナルニ從テ吾輩トノ交際ハ愈愈有益ニ赴クヘシ要スルニ此國ノ昌盛ハ則チ吾國ノ幸福ニシテ其富盛ヲ害スルモノハ則チ是レ吾國ノ災害ヲ為スモノト謂フヘキナリ今日ニ至テハ彼ノ東洋ニ流行シタル鎖國ノ氣

風ハ漸ク地ヲ拂フニ至リシヲ以テ此帝國ハ獨
 リ土地ノ位置ニ因ルノミナラス亦タ其人民發
 達シテ文明開化ノ進度ニ於テ自カラ東洋諸國
 ニ冠タルノ地位ニ居ル或說者カ博物學ニ於テ
 高等動物中ニテ人類及ヒ四足獸カ其身体ノ構
 成他ノ動物ニ優レルカ為メニ天性賦與ノ各種
 運動ヲ為スニ於テ最モ活潑自在ナリトセハ地
 理學上ニ於テ亦タ某國ハ地形恰良ニシテ港灣
 一乏シカラス溪谷アリ河流アリ他國ニ比スレ
 ハ大ニ人事ノ開進ヲ拙達スルニ適ヤリト想像

セシノ敢テ不當ニ非ルヲ知ルナリ試ミニ今此
 ノ細小ナル日本ヲ支那暹邏或ハ緬甸ト比較セ
 ハ地形ト云ヒ位置ト云ヒ其事業ニ適スル豈ニ
 只數等ノ差而已ナランヤ抑日本ハ合衆國ノ南
 西端「アラスカ州」ヨリ發シ琉球島宮古島及ヒ臺
 灣島ニ沿フテ通過シ印度ニ至テ止ミ而シテ最
 モ能ク進歩ニ敏ナル人種ノ住居セル火山連島
 ノ首部タリ恰モ此連島ハ時ニ其出生ノ地ヲ襲
 ヒ其難渋セラル人種ニ與ルニ新發動力ヲ以テシ
 或ハ時世ノ變轉ニ於テ展開スヘキ氣連ニ向テ

用意、支度ヲナサシメントシテ陽光ノ指示セ
 ル方向ニ依テ返射スル所ノ文化開明ノ先進脚
 夫トナサンカ為メ故テ東半球ノ東端ニ置カ
 レシ者ノ如シ然レモ此進路ヲ全フスルコトニ
 於テ日本ハ必ラス之カ争競者ヲ見出サ、ルヲ
 得ス既ニ英國ハ印度香港ニ魯西亞ハ中央及ヒ
 北部亞細亞ニ佛國ハ「サイゴン」ニ各々日本ニ先
 チテ其地步ヲ占メタルニ非スヤ然ラハ則チ日
 本ハ此等ノ國民ノ間ニ於テ其尊榮ノ地位ヲ保
 全スルニ十分ナル勢力ヲ得ルハ果メ奈何ノ本

源ヨリ期望スルヲ得ヘキカト問フニ日本ハ即
 チ日本ノ為スヘキ本分ノ事業ヲ成就スルノ能
 カアルアレハ唯自國ヨリ之ヲ期望スト答フル
 アランノミ何トナレハ凡ソ地上ニ生活存在ス
 ルモノハ其物ノ何タルヲ問ハス必ス其全形体
 ノ萌芽ヲ含蓄セル種子ヨリ其發生ヲ展開スル
 ハ當然ナレハナリ夫レ國民ノ氣性能力ハ時代
 ノ推移スルニ從テ多少外力ノ為メニ感動セラ
 ル、モノアリト雖モ決シテ其初發ノ根源ヨリ
 發スル所ノ性質ヲ滅絶スルニ至ルモノニ非ス

序論 四

而シテ此性質ハ生活上他ノ原質ト併存スルモ
 ノナルヲ以テ國民萎靡衰滅ノ大變アルニ非ラ
 スンハ全ク之ヲ打毀スルヲ能ハサル者ナリ故
 ニ若シ此性質ヲ失フノ時ニ至レハ此時ニシテ
 最後ノ開達將ニ閉鎖セントスル確徴ニシテ天
 運ハ既ニ其滅亡ノ日ヲ表示セリト謂ツヘキナ
 リ是ヲ以テ能ク其進路ヲ全踏シ尊榮ノ地位ヲ
 維持スルノ勢力ハ必ス之ヲ自國固有ノ氣性能
 カニ求メスンハアルヘカラサルナリ
 日本ノ政事及ヒ社會上ノ急務ヲ講究スルニ方

レハ人多クハ單ニ西洋ノ學術ヨリ求ムヘケン
 然レモ余カ必ラス日本歴史ニ就テ之ヲ求メシ
 所以ハ全ク前件ニ迷フル所ノ理由アリ且ソ未
 來ノ成果奈何ヲ發見スルノ要ハ人民ノ幼稚ヲ
 誘導セシ古賢ノ教ニ注意シ以テ人民古來ノ傳
 説ヲ説明スルニ在レハナリヘロドタス氏曰ク
 曾テ神託ニ因テ亞細亞洲中某府ノ住民ニ何人
 ニテモ先ツ地上ニ分出スル旭日ノ光線ヲ認見
 セン者ハ玉笏ヲ得ヘシト約束アリシ時ニ衆皆
 ナ眼ヲ東方ニ向ケ只管テ東天ヲ眺メタルニ獨

序論 五

リ一人ノ賢者アリ却テ反對ノ方ニ向ヒシカ其
 争競者ハ只一天暗黒ノ外未タ何物ヲモ見出セ
 サルニ此賢者ハ西方ニ於テ先ツ塔頂ニ輝ケル
 曙光ヲ見得セシトアリト余カ未來ノ約束ヲ發
 見スルノ方モ亦如是キノミ

一千八百七十八年八月廿六日小石川ニ於
 テ書ス

日本開進論卷之一



日本開進論卷之一

北亞合衆國 李全得氏 著

日本岡山縣 小松原英太郎 譯

日本岡山縣 關新吾 校

第一編

過去現在未來ニ就テ日本帝國ノ政事及ヒ
 社會上ノ改良ニ切要ナル事件ヲ論ス

紀元二百七十年即今人皇第十六代應神天皇ノ
 御宇ニ於テ孔子ノ道學ヲ漢土ヨリ輸入スルニ
 方テ日本國民ノ先導者タルモノハ争フテ此教

ニ熱心シ之カ為メニ大ナル誤謬ニ陥リ以為ラ
ク苟クモ支那ノ思想ヲシテ日本人民ニ感得セ
シメタレハ孔子ノ道學ニ基キ社會上及ヒ政事
上ニ期望スヘキ幸福ハ全ク之ヲ享ケ得ラルヘ
シト於是乎前後ノ分別モナク一撃ノ下ニ其國
固有ノ構造ヲ破滅シテ之ニ易フルニ支那ノ理
學道學及ヒ文學技術ヲ以テセリ然レトモ日本
人ハ素ト支那人ト其氣性ヲ異ニスルヲ以テ真
ニ能ク孔子ノ道ヲ理會スル能ハス而シテ尚ホ
他ニ道學ノ據ルヘキモノ無キカ故ニ只管ラ其

教ニ附着セントシテ漸ク唯僅カニ詩句文章ヲ
學ヒ得ルヲ以テ十分ニ其願望スル所ノ目的ヲ
達セリト為シ其實用ヲ務メスシテ徒ニ形容ニ
流レ實際只之カ儀樣ヲ演スルニ過キサルニ至
レリ斯ノ如ク一時無闇ニ暗黒裏ニ向テ進動シ
遂ニ混雜疑惑復々奈何トモスヘカラサルノ境
界ニ陥リシナリ然レモ日本ノ某學者嘗テ當時
ノ事ヲ論シテ言ヘルコアリ嚴冬酷寒ノ際水ハ
化シテ氷ト為リ地ハ霜雪ノ為メニ凍固シ草木
凋衰シテ樹葉地ニ委スルノ時ニ當テハ自カラ

人ヲシテ宇宙ノ萬物悉ク死枯セリトノ思想ヲ
 起サシム然レトモ春陽始テ回リ暖和ノ光輝ヲ
 放ツニ至レハ艷花綠色ノ粧ヒ新ニシテ地上更
 ラニ壯盛ノ氣色ヲ煥發スルニ非スヤト真ニ然
 リ日本始メ孔子ノ道學ヲ輸入セシヨリ道義為
 メニ枯渴シ數百年萎靡不振ノ境遇ニ沉淪セシ
 モ日本真正ノ元氣再ヒ起テ烈ク虧損シタル機
 關ニ依テ發動シ從來ノ進路ヲ變シテ日本固有
 ノ根幹ニ接合スルニ外國生ノ肥料ヲ以テスル
 ニ至リ此結合ヨリ一種格段ナル開化ヲ萌生シ

終ニ彼ノ徒ラニ支那ノ政治及ヒ道學ヲ模擬シ
 テ以テ冀望セシ所ノ幸福ヲ見出スルヲ得タリ
 然リ而シテ千八百六十七年以後日本國中ニ勢
 カアル諸人ハ又歐米ノ文明ニ關シ勉メテ日本
 ヲシテ往昔千五百年前ニ支那ヨリ文明ヲ輸入
 セントシテ履行セル覆轍ヲ踏マシメントセリ
 蓋シ其意趣ニ因レハ日本ニ於テ久シク尊奉ス
 ル所ノ君臣父子夫婦主僕ノ關係ヲ闕繫セル古
 來ノ風俗慣習ヲ舉テ悉ク之ヲ打毀シ以テ外國
 ノ制度法律ヲ輸入セント為シ通常世人カ最モ

此細ナルコトシテ利害ニ注意セサル者ト一般
一朝ニ此大事要件ヲ廢滅シテ一モ取捨分別ス
ル所ナク直チニ西洋ヲ模寫セントセリ
此等ノ目的ヲ採取センカ為メニ始計セル方略
ハ一々記載シ得ヘカラサルヘシ中ニ就テ凡ソ
活潑ノ場所（即チ政事、耕作、理財、勤勞）トシテ
必ス旧ヲ追ヒ新ヲ輸シ之ヲ試ミサル所ナシト
雖此四者ノ内耕作、理財、勤勞ノ三者ニ付テノ
論スルトキハ其實地施行ノ際ニ於テ發起者
カ此等ノ事務ニ諳練セサルヨリ遂ニ全ク失敗

ニ終局セリ
是ノ如キ時機ヲ辨ヘス無分別ナル計圖ヨリ奈
何ナル反動ノ伴隨シ來ルカハ説述ヲ待スシテ
容易ニ想像シ得ラルヘシ蓋シ一般ノ人民ハ一
ニ發起者ノ勢力ニ感動サレ嘗テ其國ニ模寫シ
テ普ク民間ニ傳播セント欲スル洋法及ヒ其社
會ノ組成ヲ理會スルコトナク只貴重ナル財本ト
光陰トヲ費シテ之カ企テ助勢シタル者ナレハ
其第一次ノ經驗ニ依テ不幸ナル結果ヲ生シタ
ルヲ見テ直チニ斷定シテ之ヲ害アルモノト為

シ當初輕卒ニ尊信セシ心ヲ移シ亦々無闇ニ之
ヲ擯斥シ過度ノ活動ニ續クニ亦々過度ノ沉着
ヲ以テシ事々皆十憂思疑惑辛苦ノ念ヲ生セシ
ムル者ニアラサルナキノ時限ヲ變現セリ夫レ
然リ故ニ假令奈何ナル能辨ヲ以テ之ヲ激勵ス
ルモ斯ノ人民ヲシテ再ヒ大胆ノ氣象ヲ發揮シ
進取ノ事業ニ熱心セシムルニ至ルハ決シテ容
易ニ非サルベシ
然レモ是ノ如キ一大困難ヲ釀成シタルハ必竟
二三ノ無分別者ノ罪ニシテ而シテ只獨リ勤勞

上ニ止テ之ヲ政事上ニ及ホスニ至ラザリシハ
真ニ社會ノ幸福ト謂ツヘシ若シ勤勞上ニ施為
セル所ヲ以テ政事上ニ施用スルヲ得セシメ
タランニハ國民ハ實ニ言フヘカラサルノ災害
ヲ蒙ラサルヲ得サルナリ何トナレハ社會及ヒ
政事上ノ真成改革ハ此等ノ人カ主張セル如ク
一種ノ外國制度ヲ其儘ニ採用スルヲ因テ行
ハル者ニアラス必スヤ既ニ日本ニ存在セル政
事及ヒ社會ニ成立セル制度ノ本然ノ變更ニ因
ラスンハアルヘカラサレハナリ蓋シ邦國ノ自

由ハ外國ノ政度ヲ模擬シ自由人民ト同一様ノ政體ヲ有スルヲ以テ必ラス存立シ得ラルヘキモノニアラス萬一然ルヲ得ヘキ者トセハ苟クモ社會政度ノ組織ヲ同フスル以上ハ必ラス同一ノ自由ヲ享有スヘク社會政度ノ組織ヲ異ニスルノ一國ニシテ一様ノ自由ヲ享有スルヲハ決シテ能ハサルヘシ今茲ニ一國アランニ其孰レヲ問ハス其一國ハ必ラス壓制不自由ノ國ナルヘシ何トナレハ自由ヲ得ルニ必要ナル政度ノ形體ヲ有セサレハナリト云フ天下豈ニ此ノ

如キ理由アランヤ

然レバ真成ノ自由ハ其國政體ノ如何ニ在ラスシテ畢竟政府ノ主義トスル所ニ於テ存スルモノタルヲハ之ヲ歴史ニ質シ理論ニ問フテ章昭明白復々疑ヲ容ル可ラス例ヘハ英國ハ彼ノ中世ノ專制政度ノ如ク政教一致ノ政體ナルニモ拘ハラズ其國ノ人民ハ他ノ政教分離ノ國民ト一樣ニ自由ノ幸福ヲ受得セルニアラスヤ而シテ英國ハ果シテ能ク如何ノ順序ニ因テ之ヲ成就シ得タリトスルカ他ナシ只古來成立セシ所

自由論

卷之二

六

成文堂藏版

ノ制度ヲ登達シタルニ在テ決シテ日本人カ企
 圖セル如ク一朝大變革ニ因テ舊來ノ制度ヲ壞
 滅シ其風俗慣習ノ奈何ヲ顧ミス全ク性質ヲ異
 ニセル外國ノ制度ヲ代用シタルニハアラサル
 ナリ抑モ英國ノ自由ハユロソウエルヨリ相續
 セシニモアラス又一千六百四十九年ノ共和政
 治ヨリ遺傳セシニモ非ス必竟古來ノ事蹟ヨリ
 遺傳シテ其國王ヲ尊崇シ上下議院及ヒ種々ノ
 結社會合ノ權利ヲ貴重スルヨリ成立シタル者
 ナリ

吾輩ハ今日本神代ノ古語ニ就テ其ノ竟見ヲ確
 實ナラシムルニ十分ナル引證ヲ見出セリ即チ
 大國主カ天照太神ノ副將ニ尋槍ヒコホコヲ授ケラレタ
 ル時ノ言辞ハ實ニ甘美深奥ナル意味ヲ含有セ
 リ抑モ尋槍ヒコホコハ大國主カ其人民ヲ統御センカ為
 メニ確定セラレタル制度ノ記號ニシテ而シテ
 其之ヲ授ケ玉ヘル旨趣ハ假令ヒ新支配者來テ
 或ハ改革ヲ行フ事アリト雖トモ然レモ既ニ久
 シク此國ヲ保全セル舊來ノ風俗慣習ハ必ラス
 貴重セサルヘカラス否ラスンハ大國主カ辛苦

日本開通論

卷之一

七

成文堂藏版

經營シテ存立シタル安寧福祉ハ遂ニ之ヲ保續
 スルヲ得サルヘシト宣フニ在ルナリ
 蓋シ近代ノ自由ハ必スシモ國會ニ於テ代理セ
 ル人民ノ主權ニ根基スル者ナリトノ想像ハ最
 モ謬妄ナル考察ニテ彼ノ十八世紀ノ末年ニ於
 テ佛蘭西人民カ先ツ其國王及ヒ貴族ヲ廢シ次
 テ又悉ク位階等級ヲ打壞シテ一般ノ人民ヲ平
 等ニシ終ニ千八百九十二年ニ於テ新ニ共和政
 體ヲ設立スルニ至リシモ全ク此虛妄ナル想像
 ヲリ出テ名ルモハナリ而シテ斯ク虛妄ナル基

地ノ上ニ建造セル國政ハ全ク其國人民ノ性質
 ニ適合セサルカ故ニ只ニ共同ノ自由ヲ發養セ
 サルノミナラス翻テ之カ生氣ヲ吸盡シ佛國ノ
 共和政治ハ主君政体ト唯治者其名ヲ異ニセル
 迄ニテ實ハ君主專制ト毫モ異ナル所ナカリキ
 然リ而シテ佛蘭西カ其政体ヲ模倣セル羅馬ニ
 在テハ嘗テ大ニ其公衆ノ自由ヲ發達シ合衆國
 モ亦タ現ニ自由ヲ發養スルノ有様ナルニ獨リ
 佛國ニ於テハ却テ自由ヲ吸盡スルノ具トナリ
 シハ他ナシ必竟其人民ノ氣質ニ適スルト否ト

ニ在ルナリ夫レ國民ハ一箇人ノ如クニ生育シ
 必ラス固有ノ意向性質ヲ存スル者ナレハ奈何
 ナル妨礙ノ之ヲ障礙スルアルモ勢ヒ常ニ其性
 質意向ノ在ル所ニ歸着スルハ寔トニ當然ノ丁
 ニシテ決メ怪シムニ足ラサルナリ佛國人民ハ
 元來君主國ニ生レナカラ共和政治ノ往々自由
 諸國ニ行ハレタル者ナルヲ以テ一朝之ヲ採用
 シテ空想上ノ自由ヲ領得セシ丁ヲ試ミタルニ
 果シテ其國性ニ適合セサルカ為メニ又君主國
 ニ復歸シ屢々權力ノ社會黨會議黨又ハ兵卒ノ

如キ實ニ不相應ナル者ノ掌握ニ歸シ人民ハ為
 メニ耐ユヘカラサル專制政下ニ立テ最モ猛烈
 ナル虐毒ヲ蒙ムルニ至レリ
 之ニ反シテ英國ハ外面ノ形容ヲ輕ンシテ真實
 ノ事業ヲ重ンシタル國ニシテ只一時曾テ正路
 ヲ踏ミ迷フタルモ直チニ開悟反正シテ決シテ
 古來ノ慣習ト離別セサルカ故ニ竟ニ能ク真王
 ノ自由ヲ領スルヲ得タリ英國ハ彼ノ佛蘭西政
 府ノ嘗テ公布セル人民無限ノ主權ヲ掌握スヘ
 シト云ヘル教條ト違ヒ政府ハ人民ニ因テ存立

ス人民ナケレハ政府アルヲ得ス（日本ニテモ
數百年前ヨリ兼認セラレタル所ナリ）ト云フ
極メテ穩當ナル主義ヲ採用セリ英國ノ政体ハ
他ノ國民ニ向テ嘗テ自由ヲ存立スルヲ得セシ
メタル例シナキ一種奇体ノ組織ナリトイヘト
モ能ク之ヲ以テ自由幸福ヲ享有シ彼ノ共和政
体ニシテ且ツ自カラ認メテ最上ノ民主政即チ
古今未曾有ノ自由政体ト為ス所ノ器具屬品ヲ
完備シタル佛蘭西ヨリモ更ラニ自由ノ樂土ナ
ルニアラスヤ

佛國人民ニ付テ論スルトコロハ又推シテ之ヲ
他ノ人民ニ論及スルヲ得ヘシ今夫レ古來諸國
ニ行ハレタル種々ノ政体ヲ取テ十分精密ニ之
ヲ吟味セハ往々只政体ノ罪ナリトスレトモ政
体ニ蒙ラシタシ弊害ハ所謂政体ノ欠典ヨリ生
シタルニハ非スシテ多クハ政府カ其基礎タル
所ノ真正主義ヲ誤ルヨリ生シタルノ結果タル
コトヲ發見スルニ至ルヘシ且ツ勿々ノ看ヲ下
ストキハ苟クモ政府ニ種々ノ形体アレハ政事
ノ真理ニ於テモ亦々様々ノ種類ナクンハアル

ヘカラサルカ如クナレ氏決シテ然ラス何等ノ
政府ニテモ其最要ノ点ニ至テハ必ラス合同一
致セル者ニテ畢竟不同ハ思察上ニ現出スル者
ニ過キサルナリ例ヘハ支那ノ憲法ハ明カニ人
民ノ階級ヲ区分シ米利堅ノ憲法ニハ悉ク之ヲ
除去シ二國ノ政治ニ於テ其人民ノ等級ニ關ス
ルトコロニテハ明カニ根理ノ不同ヲ固定セル
ニ相違ナシト雖トモ細カニ人民社會上ノ有様
ヲ穿索スルトキハ米國ニモ亦々自然ニ人民ノ
等級アリ實際ニ於テ毫モ異ナル所ナキヲ知ル

ヘシ又支那ニハ帝者アリ理論上ニテハ天子
タリト云フト雖氏若シ惡虐無道ナルトキハ必
ラス其責ヲ人民ニ受ケサルヘカラサル事ハ彼
ノ二十四朝ノ顛覆ヲ以テ証明スヘキナリ合衆
國ニハ大統領アリ其人民ニ對スル責任ニ於ケ
ル亦々大異同アルナシ支那ニ王侯貴人大臣小
吏及ヒ儒者アリテ大抵皆ナ自己ノ勤勞功績又
ハ賄賂ニ因テ各自ニ相當ノ尊敬ヲ享有シ其世
襲ニ依テ此等ノ地位ヲ得ルコトハ甚々稀レナリ
トス而シテ此地位ハ不行跡又ハ不幸ニシテ之

ヲ失フニ非ラスンハ終身能ク保持スルヲ得ベ
 シ去レハ合衆國ニモ亦タ在職ノ官吏アリ商賣
 ノ貴人アリ財貨ノ貴族アリテ各々社會高等ノ
 地位勢力ニ得テ彼ノ事務ノ不取扱ヒ又ハ天運
 ノ車輪ノ廻轉ニ因テ本來水平ノ地位ニ墮落ス
 ル迄ハ能ク其地位勢力ヲ保持シテ決シテ失フ
 丁ナカルヘシ

米支兩國ニ於テ斯ノ如ク事實ノ相類似シタル
 ハ決シテ偶然ノ結果ニアラス此ノ類似ノ成立
 スル所以ハ畢竟良政府ノ基礎トスルトコロノ

根理ニ異同ナク組成整頓セル社會ニ生住スル
 人民ハ必ス同等ナル能ハサルモノナレハナリ
 蓋シ支那ニハ四千五百年以前ニ於テ既ニ此教
 ヘアレリ若シ其理學ニ就テ穿鑿ノ勞ヲスラ厭
 ハサレハ吾輩モ容易ク其教ヲ領得スルヲ得ヘ
 シ

是故ニ人間社會ハ其本然ノ基礎ニ於テ苟クモ
 善良正真真確美麗ナル物ニ感觸スレハ必ラス
 人心ニ向テ敬愛ノ念ヲ發動セサルヲ得サルヘ
 カラサルハ則チ天意ノ自然ニ出テ人生終テ極

善極美ノ事ヲ發出スル所ノ本源タルヲ知ルナ
リ然レドモ人々皆ナ同等ニ生存シテ醜美善惡
上下貴賤ノ差別ナキ時ハ終ニ此ノ目的ヲ伸達
シ得ヘカラザルガ故ニ社會ハ恰モ一箇ノ貴族
政体ヲ為シ而シテ之ヲ組成スルノ活動物ハ總
テ尊貴神聖ナリトスト雖モ悉ク一樣同種ニ權
理ヲ有スル者ニ非ラス蓋シ人類ヲシテ他ノ動
物ヲ已ノ須要ニ供スルノ特權ヲ有セザラシメ
バ人生ハ到底保續スベカラザルガ如ク一朝若
シ社會惣体ノ人ヲシテ皆ナ生レナガラニシテ

同一富貴ノ特權ヲ享有スルヲ得セシメハ社會
ハ悉ク滅絶シテ一モ保存スル能ハサルニ至ル
ヘシ何トナレハ斯ノ如キ空妄ナル主義ハ忽チ
ニ國民同士ノ間ニ戰鬥ヲ起サシメ王侯貴人ノ
存在スル國ニテハ先ツ其王侯貴人ヲ打滅シ既
ニ之ヲ打滅セハ又彼ノ一六年前ニ於テ佛國ノ
社會黨ガ實試セシ如ク一)世襲ノ財産及ヒ力量
材智ノ不同ヨリ得タル所有權利ヲモ壓抑スル
ニ至ルヘク而シテ終ニハ天稟衆人ニ卓越スル
ノ心志ヲ有スル者モ亦々不同ノ財産特權ト共

二是レ不公平ノ事ニシテ決シテ容恕スヘキモ
 ノニ非スト論定セサルヲ得サレハナリ故ニ若
 シ人々一箇ノ有様ニ關係スルモノニ於テ吾人
 ノ認メテ公道トスル所ノ旨趣ヲ擴充シ一々之
 ヲ社會ニ施行セハ世界復々成立スヘキノ社會
 ナカルヘキナリ蓋シ社會人民ノ間ニ於テ所謂
 身分地位ノ不同ナル者ハ之ヲ法典ニ明記シ
 支那ノ如ク又ハ明記セサル（米國ノ如ク）
 ニモ拘ハラズ實際必ラス存在セサル可カラサ
 ル者トス何トナレハ若シ暫時ニテモ之ヲ禁壓

七ハ社會ハ忽チ滅亡ニ歸スレハナリ
 支那ニ於テ其人民ノ身位彼レカ如キノ等差ヲ
 為セシ所以ハ元來讀書學問ヲ以テ身分ノ等級
 ヲ立テ書物ハ奧妙ナルカ故ニ最モ之ニ蘊蓄セ
 ル智慧ヲ理會シ得ルモノハ必ス社會最上等ノ
 地位ニ列スヘシト云フノ旨意ニ出テタル者ナ
 ルカ故ニ支那國民ハ恰モ亞米利加ニ於テ貧富
 賢愚ノ等差アルカ如ク自然ニ學者ト無學者ト
 ノ二級ニ分裂シ其大イニ學問セル者ニハ社會
 最高ノ地位ヲ與ヘテ治者ノ位ニ立タシメ而シ

テ其治者即チ官吏タルノ職務ハ專ラ無學ナル者ニ向テ世事人道ヲ教授スルニ在テ被治者タルノ下民ハ唯教ヲ守リ德義ヲ恪ミサヘスレハ安全幸福ナルヲ得ヘカラシムルニ至レリ蓋シ斯ク要用寛仁ナル根理ニ據テ成立スル所ノ地位ノ不同ハ其本然ノ作用ヲ誤ラサル際ニ在テハ大イニ國ヲ利シ人民ニ向テ不測ノ便益ヲ興ヘタリト雖トモ奸邪兇惡ノ人ヲシテ徒ニ其私門ヲ富マシ威福ヲ逞フセンガ為メニ同國人民ヲ壓制スルノ便地ヲ得セシムノ好方便トナル

ニ及シテハ忽チ反對ノ結果ヲ生シ却テ不測ノ災害ヲ為スニ至レリ合衆國ノ人民モ亦々嘗テ同一轍ノ事ヲ履踐セリ其英國政府ノ壓制ヲ逃ルハニ當テハ同衆ノ均シク災運ニ遭値シテ同シク不幸ノ困苦ニ陥リタルヲ以テ宗徒ノ地位境界ハ皆ナ同等ニ平準セラレ亞米利加ノ海濱ニ上陸シテ其空漠タル荒野ト奮戦シテ之ヲ開拓シ粗暴ナル土蕃ト攻伐シ與ニ艱難危害ヲ共ニセル時ニ至ルマテハ未タ等差不同ノ痕跡モアラサリシニ保守防禦ノ止ムヲ得サルヨリ聯

結合同シテ社會ノ構造ヲ組成スルニ至ルヤ否
ヤ各自社會ノ利益ニ向テ助長スル所ノ力量ノ
差異アルヨリ冥々ノ間ニ忽チ地位ノ不同ヲ萌
生シ而シテ此ノ不同ハ必竟人々相競フテ社會
ノ公益ヲ保拔スルニ起レルモノナルヲ以テ當
初ハ社會ノ安全幸福ヲ進達スルニ於テ極メテ
洪大ノ利益ヲ生シタレトモ歲月ノ經過スルニ
從ヒ漸々生計ノ容易ナルヲ得テ最早ヤ目下ノ
缺乏ニ窮セザルガ上ニ又危害ヲ防禦スル困難
ヲ減スルノ時節到來シタレハ當初彼ノ人々相

競フテ公利ヲ進メ公益ヲ振ラシ吾レ先キニ社
會ニ功勞ヲ建テントセシ所ノ氣勢ハ變シテ逐
次ニ私慾ノ氣焰トナリ人々唯自己一分ノ出世
ヲ謀リ互ヒニ他人ノ財産ヲ併吞シテ以テ自己
ヲ豊富ニセシトナリ是レ勉ムルニ至レリ
然レトモ此弊害ハ其國民政體ノ不善ナルヨリ
結果スルニ非ラスシテ只管政府ヲ建立シタル
根理ヲ輕忽ニセルヨリ萌生スル所ノモノナレ
ハ若シ政府ヲシテ永久ニ公益ヲ保拔シ曾テ衰
頹スルヲナカラシメント欲セハ宜シク政府ヲ

建立セル公正ナル根理ヲ保存スルニ注意セス
 ンハアルベカラサルナリ故ニ何レノ國民ヲ問
 ハス若シ其利益ヲ與フルノ制度ノ變シテ災害
 ノ方便ト為ルノ點ニ到達スルニ至ラハ須ラク
 沉思熟慮シテ其制度上ニ發顯シタル弊害ハ將
 ニ如何ノ改革ニ因テ之ヲ鋤滅シ得ヘキヤヲ考
 察セサルヘカラサルノ時機ニ遭際スルモノア
 リ然レトモ其時機ハ如何ニ差シ迫リタリトモ
 又如何ニ改革ヲ必要スルニ及フトモ至極ノ注
 意ヲ以テ必ズ之ニ着手スルノ均シク有要肝腎

的ノ事タルヲ知ラザルベカラズ何トナレハ若
 シ此ニ出テズシテ匆々之ニ着手スルトキハ改
 革ノ際或ハ誤テ政体ト根理トヲ思錯シ不急ノ
 改革ヲ為シ無用ノ混雜ヲ起シ彼ノ社會全体ノ
 機關ニ向テ不意ノ變動ヲ與ヘ慣行ノ作用ヲ動
 亂スルヨリ遂ニハ種々ノ困難危害ニ陥ラザル
 ヲ得サレバナリ然リ而シテ國家ノ構造ニ於テ
 一時斯ク粗暴ナル變動ヲ起サハ必ラス非常ノ
 困難危害ヲ免ル可ラサル者ナレハ若其改革ノ
 時ニ當テ始計冀圖スル所ノ組成ヲシテ完全保

續ノカヲ具備スル愈々大ナラシメンニハ之ニ
 因テ保抜スル所ノ長久安全ナル富盛幸福モ亦
 タ從テ益々大ナラサルヘカラス故ニ開明進歩
 ノ為メニ治安靜寧ヲ必要スル近代ノ社會ニ在
 テハ此事理特ニ適切ナルモノアリ何トナレハ
 彼ノ組織單純ナル動物ハ其組成ノ緻密複雑セ
 ル者ヨリハ却テ能ク疾病困危ニ耐ユルモノニ
 シテ人類ノ如キ精緻完美ナル組織ヲ備足スル
 者ハ其慣習ニ於テ此細ナル變動ヲ受ルモ徃々
 遂ニ死ニ至ル事アルト同一理ニシテ極メテ軟

美錯雜シタル根理上ニ基立セル近世開化ノ本
 體ハ其死生存亡ノ變動ヲ支持スルニ於テハ却
 テ組織單純ナル古代ノ治化ニ及ハサルヲ遠ク
 レハナリ是レ近代開化ノ生質甚々軟弱ニシテ
 縱令此些細ノ打撃ヲ以テスルトモ大イナル感
 痛ヲ受ケ決シテ多クノ大變動ニ堪ユル能ハサ
 ル所以ナリ假ヘハ佛蘭西亞米利加ノ如キ邦國
 ニ於テ若シ一週間無法無政度ノ日ヲ與ヘタラ
 ンニハ其損害ヲ生スル實ニ無邊宏大ナルヘシ
 蓋シ所在ノ鉄道ヲ破壊スルハ一週日ヲ要セサ

ルベク鉄道既ニ破壊セハ通商旅行ノ路從テ壅塞シ此等ノ企圖ニ放テ放金セル財本ノ利潤丈ケノ損亡ヲ以テスルモ社會ノ財政ハ容易ナラザル感動ヲ受ケ一朝一夕ニ恢復スヘカラサルノ病痛ヲ發スヘシ夫レ然リ西國ノ開化ハ是ノ如ク極メテ緻密精細ナル構造ヲ完備セルヲ以テ人民若シ之ニ信依密着シテ各々能ク注意シ其本質ト体裁トヲ保持スルニ非ラスンハ決シテ其用ヲ為サズルナリ故ニ能ク其本質ト体裁トヲ保持セント欲セハ宜シク機關ノ本体ト之

カ運用トノ差別ヲ理會セサルヘカラス而シテ能ク之ヲ理會セント欲セハ注意忍耐時間ノ三者ヲ以テ勉強セズンバアルベカラザルナリ輕躁ナル佛蘭西人民ハ粗忽ニモ共和政体ヲ以テ自由ノ根基ナリト誤解シ遂ニ過去七十七年間ノ歴史ヲシテ内政ノ困難及ヒ毒亂ヲ以テ其著シキ形相タラシムルニ至レリ然ルニ英國ハ之ト異ナリ惟確實ニ其政府ノ根理ヲ守持セルヲ以テ能ク安榮富盛ノ治世ヲ保續シ大イニ自由幸福ヲ進接スルヲ得タリ支那合衆國ノ如キ

皆ナ嘗テ其政府ノ基礎タル健全ナル根理ヲ亡
 失セシカ為メニ遂ニ今日災毒ノ萌芽ヲ發生シ
 タレハ若シ急ニ之ヲ鋤滅スルノ計ヲ為スニ非
 ラスンハ支那ハ到底土崩瓦解ヲ免レサルヘク
 合衆國ハ大イニ開明ノ進歩ヲ沮滯セラル、ニ
 至ラサレハ止マサルナリ
 然レドモ日本ノ事情ハ西洋諸國ノ事情ト異ナ
 リ西洋ノ經驗ハ日本ノ引證タルノ力ヲ有セス
 ト論辯スル者モアルヘシト雖モ吾輩ハ決シテ
 其然ラサルヲ知ルナリ何トナレハ千七百年代

佛蘭西ノ大理學者「モンテン氏」ノ云ヘル如ク人
 類タルモノハ時ノ新古場所ノ如何ヲ問ハス総
 テ同一様ノ者ナレハナリ且ツ上帝ノ默示ナリ
 トシテ信用ス可キ不朽ノ大道理一已ニ説明セ
 シ所ノモノモ即チ此種ノ大道理ナリト信ス
 ニ至テハ何レノ邦國何レノ人種ニモ適應セサ
 ルナク而シテ日本特種ノ事情モ精密ニ之ヲ吟
 味スルトキハ既ニ論定セル大道理ヲシテ益々
 明白確實ナラシムルノ決着ニ到ルヘキナリ
 故ニ今吾々ハ簡短ニ日本特種ノ事情トハ果シ

テ奈何ノ事情ナルヤヲ陳述スヘシ抑モ日本國ノ構造タルヤ二千有余年前神武天皇ノ建設スル處ニ係リ蓋シ其國民ハ別種異族ノ部落ヨリ聚合セルモノニシテ泰西ノ記者力往々得意ニ説述セルガ如ク同種同族ノ一塊ニハ非サルナリ惟フニ神武天皇ノ國ヲ建ツルヤ此所ニ一地方ヲ征伏シ彼所ニ一酋長ヲ服従セシメ逐次許多ノ部落ヲ合一シテ終ニ國家ヲ構造シ武力ニ據テ之ヲ統治セシニ外ナラサレバ若シ武力ノ約束ヲ解脫シテ國民一致合同ノ感情ヲ以テ此

國家ヲ維持セシメントセハ忽チニ四分五裂シテ決シテ之カ分子ヲ依附固結スル能ハサルヲ知ルナリ現在ノ日本ハ天皇上ニ在マシ國家ノ構造ヲ維持シ人造ノ凝聚力ヲ以テ之ヲ保全セラルナリ試ミニ思ヘ薩摩長門土佐等ノ諸列ハ各自皆強勢ナル一体ヲ為シ萬一天皇ノ統治ニ依テ之ヲ一致合同セシムルニ非ラスンハ一般ノ安全幸福ニ向テ決シテ結同ノ作用ヲ為ス者ニ非ラサルヘク此等ノ分子ヲ聯絡スルノ企ハ是レマデ曾テ成就セルコトナキニアラスヤ然レ

白林開進論 卷之一 成文堂藏

ドモ到底此事ノ成功ニ至ルハ敢テ疑ヲ容ルヘ
カラス且ツ其端緒已ニ開ケ數年來ノ進歩ハ真
ニ著大ナルナキニアラズト雖ドモ前途猶ホ遠
ク未タ決シテ大成ノ場合ニ到達セリト謂フヘ
カラサルナリ

今夫レ日本帝國ヲシテ支那ノ國土ノ如ク入寇
奪掠ニ困難ナル荒漠巨大ノ國ナラシムレハ日
本政府ハ左マテ強盛ナル勢力ヲ要スルニモ及
ハザルベシ蓋シ日本人民獨立ノ氣象ヲ以テ
日本人ハ其合同ト分裂トヲ問ハス能ク獨立ノ

氣象ヲ存ス支那人ニ決シテ無キ所ノ殊性ナリ
一若シ支那ノ國土ニ在ラシメナハ假令分裂弱
少ノ弊ヲ受クルモ猶ホ能ク外敵ニ抗禦シテ各
部ノ獨立ヲ保全スルニ足ル可キニ不幸ニシテ
日本ノ國土ハ其組成支那國ノ如クナラス各自
孤獨ノカヲ以テハ免テモ獨立ヲ護持スベカラ
サル數箇ノ嶋嶼ヨリ成立スルモノナレハ其獨
立ヲ保存スルノ最モ安全ナル方策ハ須ラク國
民ヲ統轄シテ一規律ノ下ニ混同セシムルニ若
クモノナキナリ或ハ曰ク日本ハ決シテ外國脅

二十

迫ノ患ヒアルヘカラス何ンゾ國カノ薄弱ヲ憂
 ヘント是レ實ニ愚ノ甚シキモノト謂ハサルヲ
 得ズ何トナレハ日本ハ今現ニ歐米諸國ヨリ畏
 懼スヘキノ事情ナシト雖トモ猶二三ノ恐ル可
 キ隣國アリ其一ハ則チ魯國ニシテ此國ト親睦
 ヲ保存セント欲セハ我レ能ク強盛ノ勢力ヲ發
 シ彼ヲシテ我レノ交親ヲ重ンゼシムルモノア
 ルニ非スンハ能ハス日本ノ為メニハ寔トニ恐
 ルヘキ憂フヘキノ國ト謂ハサルベカラザルナ
 リ其二ハ則チ朝鮮ニシテ假令小弱國ニシテ曾

テ自カラ危害ヲ呈スルノ勢カナキモ若シ他ノ
 強暴國ヲシテ其侵畧ヲ行フノ場所ト為ル事ア
 ルニ至ラシメハ亦タ寔トニ恐ルヘキ國ナリト
 謂ハサル可カラス其三ニハ則チ支那アリ今日
 ニ於テハ敢テ恐ルニ足ラスト雖トモ一朝英主
 ノ出ルアリテ大ニ之カ改良ヲ為シ其面目ヲ一
 新スルニ至ラバ支那ハ復タ今日ノ支那ニアラ
 サルヘク而シテ又現今彼レノ衰弱ハ一旦容易
 ニ振起スベカラサルノ證據ト為スヲ得ス何ト
 ナレハ支那ガ屢々奮起シテ新タニ元氣ヲ恢復

シ強盛活潑ナル勢力ヲ發生シタルハ皆ナ現今ノ如キ困苦衰弱ノ有様ヨリセシモノナレハナリ加フルニ支那ハ今マ將ニ開運ノ時節ニ到着セントスル者ノ如シ蓋シ現在ノ清朝ハ殆ント已ニ二百五十年間ノ治御ヲ保チ中世以還ノ諸朝ニ於テ稀レニ其比ヲ見ル所ナリ故ニ其國家ヲ改造シ其面目ヲ一新シ日本ノ恐怖スヘキモノトナルモ亦タ將ニ遠キニ非サルヲ知ルナリ故ニ日本ノ為メニ計ルニ今日ヨリ豫シメ此等ノ事情ニ應スルノ用意ヲナシ農桑物産ノ業ヲ

盛ンニシテ富實ノ本源ヲ開發シ工業貿易ヲ増極シテ大イニ國力ヲ充足シ以テ海軍ヲ盛大ニシ陸軍ヲ擴張セスンハアルヘカラス然リ而シテ最モ能ク此目的ニ適應スル政体ハ則チ帝室政治ニ在テ民主政治ニアラサルナリ古來ノ經驗ニ據テ民主政治ノ行ハレタル諸國ノ行情ヲ考フルニ彼ノ撰擧ノ法ナル者ハ決シテ強盛ナル政府ヲ生スル所以ニ非ラサルナリ何トナレハ人民多數ノ撰擧ニ依テ一朝權力ヲ掌有セシ者ハ再任ノ期スヘカラサルコトヲ懼ル、ガ為

メニ勤モスレハ公愛勸精ノ志氣ヲ挫キ遂ニ政
府ノ官吏ヲシテ義務ヲ怠レテ私計ニ趨リ國家
ノ公益ヲ擱テ已レテ撰舉セシ者ノ利益ヲノミ
是レ謀ラシムルニ至ル此弊ヤ寔トニ免レ難キ
所アリ彼ノ共和政治ヲ以テ盡界ニ誇耀スル合
衆國ニ於テスラ法官ノ如キ或ル官職ノ撰任ニ
就テハ漸ク撰舉ノ害惡ナルコトヲ悟察スルニ
至リシニアラスヤ外交官吏ノ場合ニ於テモ非
常ノ害惡ヲ為シタルコトハ合衆國ニ外務課ノ
功勞擧ラサル課多キヲ見テモ知ルヘキナリ前

ノ大統領ゼネラルグラントハ夙トニ茲ニ洞察
スル所アリ其全体ノ任官職制ヲ擧テ之ヲ立君
政府ニ行ハル、所ノ根理ニ原イテ改正センコ
トヲ盡カシタリ且ツ海陸二軍ノ如キニ至テハ
昔ヨリ嘗テ撰舉法ノ應用セラレシコトアラサ
ルナリ何トナレハ嚴然タル規律ナキトキハ海
陸二軍ノ勢威ハ決シテ振フ能ハサレハナリ凡
テ民主政治ノ國ニ於テハ嚴然タル規律ハ到底
行レ難キニ於テチヤ合衆國ノ如キハ幸ヒニ地
位ノ宜キト國ノ巨大ナルトニ因テ外寇ノ恐レ

少ナク而シテ國內緊要ノ改革ハ總テ民撰官吏
 ニ依テ容易ニ之ヲ舉行シ得ヘキモノナレハ敢
 テ強盛ナル政府ヲ要スルニ及ハサルナリ
 然レドモ日本ノ如ク人民ハ從來鼻屈自ラ甘ン
 シテ唯々其ノ日用必需品ヲ得ルニ満足シ亦夕
 他ニ念慮ヲ勞スルコトナク只管ラ政府ニノミ
 是レ依頼シタルヲ以テ工作勤勞商業ノコトヨ
 リ租税立法政治ノ組成ニ至ルマテ悉ク皆ナ其
 改造ヲ要セサルモノナク加フルニ外ニハ強國
 ノ疆ニ迫ルハ憂ヒアリ内ニハ獨立ヲ保全スベ

キ方略ノ眼前ニ施行セサルベカラサルモノア
 リ他邦國ニ比シテ其場合大イニ相異ナリ斯ノ
 如キ境土ニ居住セル國民ハ合衆國ノ如ク只各
 人ノ聚合ニ依テ成立シ得ヘキモノニ非ラス必
 スヤ其進退動作ヲ指揮スル所ノ精神アリ首領
 アリ全ク機關ノ組成ヲ具足セル一大塊躰無ラ
 サルベカラサルナリ故ニ斯ノ如キ國民ノ為メ
 ニハ天子上ニ在テ賢明ノ官吏之ヲ補翼スルノ
 制度ユソ實ニ願望スベキ最上ノ政体ナリ信ト
 ヤ日本ノ開化ハ則チ貴族ノ事業ニシテ畢竟ニ

三ノ人物カ法則順序ヲ考定シテ威力ニ據テ之ヲ執行セルニ起源シ而シテ開化ヲ保護存養スルノ事業モ亦タ貴族ノ手ニ成リ總テ日本ノ國事ハ愚昧ナル人民ノ小部分ヨリ創成保存スル所ニ係リ過半ノ人民ハ（農商）嘗テ政体ノ何物タルヲモ知ラサル者ナリ故ニ此ノ如キ國民ノ元氣ヲ保存シ其將來ノ大望ヲ成就セント欲セハ必ラス國事ヲ擔當シテ其責ニ任スル英明ナル人物ノ聚合ナカルヘカラス而シテ此ノ目的ニ應スル最良ノ制度ハ王朝ニ在リ何トナレ

ハ國民ノ命運ヲ以テ之ヲ王朝ニ聯結シテコソ能ク日本ノ事情ニ適シテ果シテ將來ノ富榮昌盛ヲ保按スルヲ得ベケレバナリ

日本開進論卷之一畢

日本... 卷之一

明治十二年一月十五日 版權免許

明治十二年一月十五日

版權免許

譯者

岡山縣士族

小松原英太郎

縣下備前國御野郡青江村
三十五番地

出版人

大阪府平民

山田朔郎

府下西區土佐堀通壹丁目
四番地

發賣人

全

吉岡平助

府下東區備後町四丁目
三十番地



010190532831

